博士学位論文要約

チベット仏教寺院の伝統と革新

―内モンゴルフフホト市域の事例を中心に―

根敦阿斯尔

1　博士論文全体の要約

本博士論文の目的は、チベット仏教寺院の伝統と革新を研究し、内モンゴルにおけるチベット仏教寺院をめぐる仏教の伝播・実践と、現在までの仏教伝承や寺院の継承、および僧侶の現状との変容を明らかにすることで、チベット仏教の持続と革新を目指すことにある。

本論文で取り上げるフフホト市域(内モンゴル自治区の首府)には、明朝末期から解放以前まで、チベット仏教の寺院は、87 カ所もあった。「召城」（お寺の町）とも呼ばれたように、フフホト市はチベット仏教寺院を中心に形成された町である。しかし、内モンゴルにおける諸宗教文化は、中国が行った文革大革命（以下、「文革」と略す）という政治運動によって徹底的に破壊された。それとともに、各地域の伝統的な宗教儀礼や宗教信仰も、その政治の中に巻き込まれ、政治運動の直前の 1950 年代末までに完全に停止された状態になった。文革後の 1980 年代から各地域の宗教儀礼は、次第に復活していった。1990 年代から、観光化などにより本格的な復活の道を歩み始め、21 世紀に入ってから興隆の段階に入った。そして、チベット仏教の伝統的な寺院建築が復興され、伝統的な法会や儀礼などが各地域で盛んに行われている。それらは観光資源として開発されている。観光資源開発の影響で、多くのチベット仏教寺院が、「国家一級文物単位」、あるいは「非物質文化の遺産」などを申請し、登録されている。こうした観光化のなかで、今日行われている内モンゴルにおけるチベット仏教寺院の神秘的な「チャム儀礼」、「バリン儀礼」、および「マニ法会」などは、内モンゴル地域の特色あるチベット仏教寺院の伝統と革新について新たな視点を提起しているように思われる。

本博士論文は、こうした状況を前提としたうえで、①現代社会背景の中で、内モンゴルにおけるチベット仏教寺院の僧侶の養成や法会での行為は、いかに継承されてきたのだろうか。②中国社会主義の核心的価値観において、チベット仏教寺院の伝統的な宗教文化はどのような役割を演じているだろうか。③1980 年以降に復興されたチベット仏教寺院は、果たして従来のチベット仏教に関する定義を用いて解釈し得るのだろうか、という点に立脚し、主要寺院の復興と僧侶の養成、法会の中の儀礼、の三つを取り上げ、仏教寺院の伝統と革新を明らかにした。さらに、法会中の念仏踊りと供物儀礼をめぐる一連の寺院行為の深層にある意味、役割、変化などを抽出して分析し、解明した。

2　博士論文各章の要約

序章では、先に述べた博士論文の研究動機と目的、先行研究、問題の所在、調査地の地理的範疇とその全体象を明らかにするとともに、チベット仏教に関するこれまでの国内外の先行研究について整理し、解明・例証すべき課題を明確にした。

第 1 章「内モンゴルにおけるチベット仏教の歴史的展開」では、チベット仏教の根源を踏まえたうえで、国家や民族の固有文化と融合して、さまざまな特色をもつようになったチベット仏教が、内モンゴルで歴史的にどのように受容されたのかを分析した。あわせて、中華人民共和国成立以前を一つの時代の区切りとして、清朝期から中華民国期にかけての伝統的仏教と民俗の関係について、文字史料の検討から明らかにした。中華人民共和国成立前の旧社会におけるモンゴル人の伝統的なチベット仏教の伝統的な信仰は、モンゴル人の娯楽、婚礼、葬儀などの儀礼に見られ、現在の伝統的なチベット仏教の信仰の形態や出家習俗は、伝統的な形式と異なるようになったことについて論及した。

第 2 章「調査対象地とチベット仏教寺院」では、近年、急速な経済発展を遂げている内モンゴル自治区の首府フフホトの概況をまとめた。あわせて、モンゴル族の漢化や、チベット仏教寺院の盛衰と復興などの実態、現在の寺院の変化について述べた。中国国内において、チベット仏教の伝統文化は、政治運動の期間に破壊された後、1980 年以降になると、公式に復活し始めたことが明らかになった。また、聞き取り調査などから、調査対象地の寺院の現状と変化について述べた。

第 3 章「内モンゴルにおける僧侶の現状」では、チベット仏教の基本的教義と「法」の概念、およびラマの語義と僧侶の現状について検討した。まず、僧侶の語義について、経典、辞書などの文献資料や研究書などから実証した。そして、具体的事例として、僧侶のオーラル・ヒストリーから、フフホト市域における出家の目的と寺院の継承の現状を明らかにした。また、内モンゴルにおけるチベット仏教寺院の食文化がもつ伝統と変容について論及した。そのうえで、現在の出家僧と在家僧の違い、および出家の形態と信仰意識、あるいは近現代政治の転換期との関係に注目して寺院内側の実態を明らかにした。

第 4 章「僧侶養成と念仏の革新」では、イック・ジョー寺の事例を中心に、観音菩薩信仰の色彩をもつマニ法会を取り上げ、マニ法会をめぐる世俗化や信仰形態の変化に注目した。その上で、現在の内モンゴル地域において行われているマニ法会の性格と信者の特徴を分析した。さらに、マニ法会に関する調査に基づき、イック・ジョー寺のマニ法会をめぐる仏教民俗の変化と寺院の継承の問題について論及した。

第 5 章「バリン儀礼をめぐるモンゴル仏教の特徴」では、チベット仏教寺院の最大の祈願大法会で行われているバリン儀礼について検討した。バリン儀礼は、供物の素材や地域や民俗の影響を受け、多様な要素が付加されるようになった。本章では、イック・ジョー寺と他地域のチェージャル・バリンを比較し、バリンの形態の変化を明らかにした。また、フフホト市域におけるチベット仏教寺院の伝統的な供物儀礼の変化、および儀礼の性

格、役割、意義などについても述べた。さらに、バリン儀礼からみた仏教と民俗の関係、仏教文化の変化などについて論及した。

第 6 章「チャムをめぐる仏教と民俗」では、フフホト市域におけるチベット仏教寺院におけるチャムという踊りがもつ仏教と民俗の関係について注目した。ここでは、主にイック・ジョー寺のチャム踊りを事例として取り上げた。この踊りは他の寺の踊りの影響を受けて作られたチャム踊りであるが、本寺院の伝統チャム踊りと呼ばれ、継承されていた。こうした事例から、イック・ジョーのチャムの復興の意義、目的、その変化、および社会における役割を明らかにした。また、チャム儀礼の研究を通して、観光化した寺院における僧侶の念仏踊りの目的や意味などを検討した。

終章「総括と展望」では、チベット仏教伝承の性格と寺院の現代的な役割、および仏教伝承と寺院継承の現在までの変化について、各章で導き出された結論から考察した。

以上のように、本論文では、内モンゴルフフホト市域のチベット仏教寺院の事例を取り上げ、寺院復興の辿ってきた歴史の実態と、現在までの仏教伝承の性格と寺院の継承、および僧侶の現状との変化について分析を行ったうえで、チベット仏教の持続と革新の問題に重点を置いて考察した。そのうえで、現代社会における伝統文化の消失と現代への適応という論点を明示し、結語とした。そうして最後に、今後の展望を示すことによって本研究を閉じた。